

「ニヤ。不意に、けたたましい犬どもの叫びと乱れた馬のおびたらしい蹄の音。子どもひとりかやにわに飛び出して行く。やがて裸馬にまたがって駆け戻って来たパヴルーシヤは、狼が来たのだと思つたと平気な声で言う。この少年は「棒きれ一つもたず、夜中に、少しもためらうことなく、たったひとりで狼を目ざして馬を飛ばしたのだ。」

(佐々木彰氏訳文)

広野の夜の闇の底で、燃え上りまた衰える焚火にちらちらと照らし出される子どもたちの一人ひとり。そこにはやがて仄かな暁の光の中に、広野の中で生い立ちそれぞれ一人前の人間に育っていくだろう子どもたちの姿がしだいに見定められていく。

あの香気に満ちたツルゲーネフの作品を引きごとにするのも気がひけるが、大事なのは個性であり、平均値や公約数ではない。そして個性とは選択の問題である。選択は同時に放棄の反面を持っている。或る木は白い花を咲かせ、他の木は赤い花をつける。私たちにすべてが可能でない以上、選ぶためには棄てなければならぬだろう。一

つの個性を育てあげるためには、棄てなければならぬものことは覚悟しなければならぬまい。パヴルーシヤは立派であるけれども、イリュエーシヤをそれにとりかえるわけにはいかない。

ひとりっ子の個性であろうとも、別のものをそれにとりかえたいとは思わない。

ひとりっ子の親のひそかな独り言である。

○

京子

今からざっと五〇年くらい前（大正三年）私の育った土地（東京）の幼稚園で、毎朝会集の時に、または組々のお室で、その頃の幼子達（現在は社会人として、それぞれ重要なポストで活躍したりまた母として、祖母として一家団欒の中心になっておられる方々）にうたわれていた歌のかず多くある中に、今もなおそのまま、うたいつづけられているものと、もう、すっかり忘

れられてしまった歌があります。何という事なしに、ふと、思いつくまにこの二つをほんの少々ならべてみました。

忘れられたうた（A）

おひさま

うぐいす

桃太郎

大きむ小さむ

たまき

一寸法師

など。

『たまき』は一クラス（三十人位）全部手をつないで、たいてい先頭は若い先生で、みんな一しょにうたいながら、だんだん円を小さくし、中央から逆に、うずまきをほどくように歩き、最後の二人が手をあげて、トンネルを作り、みんな、そこをくぐって、大きい円にもどる、とてもたのしい、あそび、のついた歌でした。

『桃太郎』『おひさま』ふたつとも簡単な動作が付き、ゆうぎと言っていました。

その他『汽笛いっせい』の曲にあわせて歌ったのに、次のようながありました。

からすが かあかあ ないている

すずめも ちうちう なきでした
 しょーじもあかるく なってきた
 はーやく おきないとおそくなる
 きものを きいかえ おびをしめ
 かおおぼ ていねに よくあら
 きれいに なったら おはようと
 ああきの れいぎを いたしましよ
 「うぐいす」の歌は、鳥と子どもにわか
 て、歌いわけ、最後の「ケキョ〜」

おひさま

1.あ が る あ が る お ひーさ ま あ が ー る
 2.は い る ほ い る お ひーさ ま あ は い ー る
 ひ が し の そ ま に き う ら す き ー ら
 3.さ よ な ら お ひーさ ま あ し た ま た お め に

うぐいす

ちいさいこ ちいさいこ あなたはなにを しています
 わたしはうめを かい できます うめを かいで そーれから
 それからうたを うたいます なんの うたを うたいます
 さいわいあおい きものきて ケキョケキョケキョケキョ けきょ

ももたるう

ももたるおんのおともには いぬさるきじの きびきよ
 おとも(お)びに なにやえう にっぼんいちの きびだんご

おおさむ こさむ

おさむこさむ ふゆのかぜ あれあれからすが よついつつ
 かあかあかあ と ないていく あれは おぐらに かんるのか

たまき

めぐれど はしなき たまきのごとくに
 まどかに めぐれや やよこーどーも
 よきうた うたい めぐれよ たれも

「〜」のところだけ、鳥も子どもも一しょ
 にうたうので、子ども達が大へん好きな歌
 でした。
 その頃から、今なおうたわれているうた
 (B)
 お正月 (もういくつねると)
 水鉄砲
 蝶々
 ひいらいた ひいらいた
 むすんで ひらいて

かーごめかごめ (これは歌というより
 もうたあそびと言いましようか、
 遊びを主とするうたで、唱歌の部類
 には、入らないと思います)。
 Aのうたは、歌詞だけでなく、曲も表し
 たいと思いましたが、古い記録を全部焼失
 した私には自分のたどどしい記憶による
 より他に方法がないので、記してはみまし
 たが、まちがっているところも多々あると
 存じますがお許し下さい。